こんなところに
仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

袈裟

袈裟懸けのバッグという言い方があります。これは、肩から斜めに懸けるバッグの事です。剣術に於いて袈裟切りという言い方あります。これは、相手に向かって右肩から左脇に斜めに切る事です。

袈裟は、出家者の衣の事で、古代インド語で kasaya と表記し、赤褐色という色の意味でした。これは、出家者は財産を持つことを禁じられており、衣服も同様でした。そこで、もう使われていない布などをつなぎ合わせて一つの衣にしました。在家の人や他の宗教者と区別をするため、草や錆などで染色をし、オレンジ色になったため、kasaya と言われたのです。

普段は両肩に巻き付けるように身にまとい、尊敬する方に会う時には、右肩を出します。これは、インドでは右は清浄を表し、右肩を出すことは敵意がない事を意味したのです。そして、左肩から斜めに懸ける事から、袈裟懸け、袈裟切りという言葉が生まれたのです。

この袈裟は、中国において、儀礼用に装飾をされ、華美になっていきました。

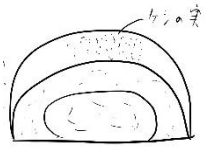
コツコツコツコツ
これが目的地への最短ルート

芥子

アンパンやお菓子にまぶされている事がある芥子の実。今回は「芥子」のご紹介です。芥子自体は仏教用語ではありませんが、お経の中に「芥子の実」が時々出てきます。芥子の実は非常に小さく、日本で5月ぐらいにオレンジの花を咲かせるナガミヒナゲシは、花が咲いた後の実の中には、一六〇〇粒の種が入っているそうです。

古代インドにおいて、薬用や食用、油の原料として民衆にも広まっていました。現在の日本では、芥子の種類によってアヘンなどの材料になるため、違法になるので注意が必要です。

仏典での芥子の有名な所は、芥子劫という時間の長さの譬えです。阿弥陀如来が人々を救うために思案をされた時間が五劫です。一劫が、約十キロ立方メートルの大きな箱の中に芥子の実が満杯に入っていて、数年に一度一粒取り出し、芥子の実がすべてなくなった時間が一劫と表します。永遠の時間を古代インド人は譬えたのです。



また、子どもを亡くした母親が釈尊に相談し、釈尊から「一人も死者を出していない家から芥子の実をもらってきなさい」といい、母親は死者を出したこのない家は一軒もない事を悟ります。